

学びのコミュニティ ⑬

「コミュニティ・スクールについて本気で語り合う」

～国の動きと愛媛の取り組みから、これからの国や地域の教育を考える～

平成 29 年 1 月 22 日 学習会 13 : 00 ~ 17 : 30
親睦会 18 : 00 ~ 20 : 00
エスポワール愛媛文教会館
(松山市祝谷 1 丁目 5-33)



1 問題提起講演

「これからの未来の学校・地域の姿について話をしよう」

文部科学省初等中等教育局参事官 木村 直人氏



自由な感じで聞いていただきたい。

やりたいことがあるのに出来ないなどと思っている人がたくさんいるので、現在、全国各地を回って話をさせていただいている。学校や地域がよくなると、全体が活性化されて変わっていく。

子どもたちをめぐる問題について

現在は、過去にもまして困難な時代。今の子どもの65%は大学を卒業し、かつては存在していなかったような職業につくだろうと予測されている。いつの時代でも未来は予測できないが現在は世の中の移り変わりのスピードが加速している。商品についても、どのような製品がでてくるかも誰もわからない。併せて、少子高齢化。人口の減少。税収も減っていく。このまま何もしなければ負のスパイラルで、日本はだめになる。このままにしておくわけにはいかない。新しい答えを出していく必要がある。失われた10年が終わって、将来の日本を元気にしてくれるのは、子どもたちである。予測困難な将来を、そして見たこともない課題を乗り越えていく力をつけて行ってほしい。そのためには、身につけた知識を応用して、自ら考え解決に向け実行にうつせる思考力・判断力・表現力を持つ人材が必要。商品やサービスに付加価値を生みだすことのできるビジネスモデルを創造できる力が求められる。

それを教育ですすめていくことができるか。支えるものとして先生の専門性はいうまでもないが、教員だけでは足りないところを補完していく役割としての保護者や地域の役割が重要である。これを実践していくことが、まさに社会に開かれた教育課程である。独りよがりの行動ではだめ。必要な知識を身に付けていくためには、外側の人とのコミュニケーションがいる。そのためのツールがアクティブラーニング。基本的知識の習得。結果を自分の学びとし、人生を作り上げていくようにするにはどうすればいいか。対話的学びや主体的な学びをととして自分が興味関心を持ち、自分を見通しねばり強くかわることにより、自ら判断し、行動できる人材を作り上げていくことである。

子どもたちは、対話的な学びーコミュニケーション力が不足している。外側にいる人とコミュニケーションすることによって、新しいヒントや気づきを得られる。

基礎的な知識をベースにして、新しい課題を思いつき、どうやって解決していくか導いていく。そのようなアクションを起こせばいいのか、これを導くことができるのが、深い学び。チーム学校がうまく機能すれば、結果として、難しい社会・環境の中でも生き抜いていける可能性が大いに高まると信じている。

チームとしての学校への転換がどうして必要か。チームとは何か。

世の中だけではなく、学校を取り巻く環境も複雑化している。特別な支援を必要とする子ども、不登校、経済的にも厳しい子などがどんどん増えてきている。また、共稼ぎが増え、家庭での教育力が低下している。先生中心であった学校そのものが、今後、持続可能な活動を行えるのか。教員の長時間労働の問題も深刻化。仕事そのものが多すぎる。加えて増え続ける保護者（いわゆるモンスターペアレンツ）への対応、なんとかして解消していかなくてはならない。

先生は子どもと向き合う時間が少ない。日本の学校は先生が子どもの問題にすべて対応していて、専門スタッフの対応は少ない。イギリスの先生は、教育は先生、事務は事務職、教育以外のことは専門職で、先生は本来しなくていけない仕事をしている。

今後、スクールワーカーやスクールソーシャルワーカーなど専門的な知識を持った方々も学校の一員としてチームを構成する。その中で、事務職員に経営にも参加していただく。この様な取組を進める中で、先生は授業に特化できる環境が構築される。さらに多様なメンバーを取りまとめ、学校としてのビジョンを達成するためのマネージメントの強化は重要。校長先生を中心とした研修プログラム、事務体制の強化。業務環境の精選をしてもらう中で今までの学校の経営スタイルからの変革を図らなければいけない。文部科学大臣からの1月6日の年頭あいさつには、学校の業務改善の話があった。文科省としてもこれからの重要な政策の一つとして取り組んでいく。

チーム学校を実現するうえでは、協働の文化を構築することが必須。縦割りにしてしまっただけでは意味がない。お互いが補い合うことによって、相乗効果が生まれてくる。共に働くことで、意識しながら働ける。みんながチームの一員として働いていく。大事なのが、マネージメント。ビジョンをみんなで共有する。アクションを同じベクトルで、役割分担をし、目指すべき方向性の共有を図ることが必要である。

唯一、行政職である事務職員の役割は大切。財務や法律的な能力・知識を生かして、学校経営に貢献できる。効率化ができれば、このような経営に参加しようということで事務職員自らのモチベーションがあがると思う。事務職員も経営の一端を担うという意識を持ってほしい。もちろん学校の先生も。バックグラウンドをもったいろんな人たちがいて、まとまることによりチーム学校となる。

コミュニティ・スクールについて

どの学校でも、多かれ少なかれ地域との連携を行っているが、地域ぐるみでどのような子どもたちを育てたいか。学校と地域の関係を相互補完的に連携・協働していくものに発展させていく必要がある。

学校運営協議会制度は、保護者、地域、専門家、学校が情報を共有し、子どもを応援していくんだというプロセスを盛り込んでいる。教育活動・運営についても、しっかり理解した上で関わることにより、家庭や地域における役割分担が明確になる。

コミュニティ・スクールのメリットとして、組織的・継続的活動が可能。地域は目指すべき教育ビジョンを学校と共有し、自分たちが学校運営に携わっているという意識を持つ。自分たちの活動が学校をよくしているという気持ち、自己有用感として、フィードバックしていく。

コミュニティ・スクールの校長先生に意見を聞いた。地域との連携が密になった、保護者からのクレームが減った。地域が一丸となって子どもたちの見守りを行うことにより、いじめ、不登校が減った。先生の負担は一時的に増えるが、将来的には減っていく。ただ、先生方の負担はコミュニティ・スクールをやったからと言って大幅に減るわけではない。ほかの改善策も含めて解決していかなければいけない課題である。

東京都三鷹市は8年前、市内全22校を指定し、全中学校区で小中一貫コミュニティ・スクールを推進した。どんなアクションを起こせばいいか。ビジョンを義務教育の9年間で実践している。

長野県塩尻市においても、熟議と協働による12年間の保小中一貫コミュニティ・スクールを両小野学園にて展開。地域学習に力を入れ、地域人とのかかわりを盛んにしている。両小野地区の歴史、文化、産業や人々の生き方にかかわることで、ふるさとを愛する子を育てる。ふるさと探求によって、自己有用

感、自己肯定感を育み、自己の生き方を見つめ、自らの将来に向かってたくましく生きる子どもを育成できる。組織的、継続的取り組みができるようになる。たとえば、ボランティアガイドを中学生がする。つくった食事のメニューを提供する。

学校と地域が共に働くという環境を作る。関係者が当事者意識を持って熟議をする。その結果をもとに「子どもはどう育てほしいか」という同じ方向性のもとに経営をマネージしていくことにより目標を共有した活動が可能となる。

地域とのかかわりの中で、「よかったよ。」「助かったよ。」といわれると、「してよかったな」と子どもも思う。自己肯定感のない日本の子ども。活動の中から殻を破って自分を大切に思う子どもとなってほしい。

コミュニティ・スクールにはまだまだ課題や皆さんの懸念・不安もある。それを一つ一つ潰していき、よりよいものにしたい。現時点で以下のようなことを考えている。

- (1) 学校運営協議会は学校をサポートする役割であることを明確化
- (2) 地域コーディネーターの協議会への関わりを必須とする
- (3) 校長先生の関与を明確化。運営協議会のメンバーを決めるのに校長先生からも意見を言うことができるようにする。これにより校長先生がリーダーシップを発揮できる環境を作る。
- (4) 教職員の任用について、制限がなく意見が言えるということについての不安が大きいと聞く。人事権の濫用になるという心配があるようだが、協議会の本来の活動趣旨を考えればこのような意見が出ることも自体ありえないと思うが、今後の制度改善の中で、前向きな意見が出やすいような環境を作っていく。
- (5) 小規模校が運営するのは大変なので、例えば小中一貫的に複数の学校で同じ方向性の取組を行う場合には、1つの運営協議会を設置すればいいようにしたい。

これらが主な改善点ではあるが、これ以外にも工夫次第で円滑にすすめることができることが多いと思う。臨機応変に多様に考えていけばいい。

終わりに

自分の地域をよくするためには何が必要なのか、解決していくのは自分たちなんだという当事者意識が必要。地域をよくするには学校がよくなる必要がある。学校がよくなれば地域もよくなる。自分の地域の子どもは自分たちで育てていこうという意識。この思いをしっかりと持ち続けることが、持続するためのポイント。うまくいくヒントを各地域で考え、どんどん実践してほしい。いい事例がすでに出てきているのでそれを参考にもしてほしい。ただ、単にまねをするだけではだめ。自分のものにするためには決して無理はしないことも大事。

成功事例があれば、また次につながっていく。これを積み重ねていくこと。一歩ずつ前に進んでほしい。ゆっくりでもいいから、続けていく。何年か後には、必ず成果がある。子どもたちをよりよく育てるにはどうしたらいいか。過去は変えられないが今は変えられる。今を変えないと将来は変わらない。がんばってください。